



中種子町の折戸るみ子さんは就農17年目のレザリーフファーン農家です。就農前は町内の企業に勤めながら子育てに奮闘していましたが、子育ての時間を増やしたいという思いがあり農業を始めました。

就農当初に10㍓を作付。生育管理を徹底し、現在まで植え替えもせず、継続して一定量の出荷に成功しました。

中種子町花き振興会の女性部長も7年間務めるなど、農業経営に意欲を燃やしています。

現役農家からの勧め

生産のしやすさが魅力

折戸さんは一般企業に勤めたことしかなく、農業の知識は全くありませんでしたが、農業が盛んな種子島で働くことで、現役農家の知人も多く、サトウキビや澱粉原料用甘藷などの農産物についての情報を聞く機会が多々ありました。

レザリーフファーン農家の知人と話をした際「サトウキビ栽培のように農業機械を多く使わず、力仕事も少ない。女性一人でも生産しやすい」と聞いたことがきっかけとなり、就農することを決意しました。

会社員と農家の違い

時間に縛られず子育て充実

就農当初、花きで会社員時代と同じように収益が上がるのか、本当に女性一人でも農業ができるのかと不安が多かったようですが、花き振興会に加入し、レザリーフ農家のハウスを視察するなど勉強を重ね、10㍓を作付け「作業を始めてみれば10㍓は女性一人でも管理できる丁度良い面積だった。時間にも余裕ができ子育ての時間も増えた。時間に縛られることがないため、子育てがさらに楽しくなった」と話しました。

家族経営と

女性農家増加への思い

子育てと農業を両立して続けてきた折戸さんは「子育ても落ち着いた。今度は夫が退職した後に家族経営をしてみたい」と熱意を燃やしています。

また、女性農家の増加にも強い思いがありました。

「女性でも気軽に挑戦できるのが農業。私が教えてもらったことを若い女性の方に伝えたい。女性農家が増えてほしい。一緒に種子屋久を盛り上げていきたい」と思いを込めました。